

2023年7月22日開催トータルライフサポート

「林忠正と松方幸次郎—二人の西洋美術コレクター」

講演概要

<講師：馬淵 明子氏（美術史家、日本女子大学名誉教授、前国立西洋美術館長）>

【林忠正】 1853～1906年

日本人として最初に、西洋美術コレクションを作った画商。

1878年、大学南校（現東京大学）を卒業直前に退学し、パリ万博の通訳としてパリに渡り、そのままパリに居ついた。当時、日本の工芸品は人気があり、浮世絵・工芸品（明治時代の物）等を取り寄せて、ヨーロッパの市場で売る商売を始めた。パリ人も目が肥えてくると、江戸時代以前の桃山時代等の作品に関心が高まり、古いものも取り寄せるようになった。

1883年には、ルイ・ゴンスの『日本美術』の執筆を手伝う。これは、ヨーロッパで初めての日本美術についての本であった。

1884年に、日本の画商と組んでパリに美術店を開く。その2年後に店を移転し、大々的に日本美術を売り始める。

1890年代には、日本に美術館を作ることを公表し、日本の美術品と交換して西洋美術を意図的に集め始める。

特に、日本の浮世絵に興味を持っていたモネ、ドガ、ピサロ達など印象派の画家たちと親交を結び、交換して手に入れた印象派の作品を日本に紹介。

当時の日本政府には、政治経済で困難な時代であったので美術館を建てる余裕はなかった。

1893年のシカゴ万博に、鈴木長吉作の素晴らしい金工品『十二の鷹』を出品。この作品は、林がプロデュースし、当時の最高の技術を使った作品で、日本美術の力を世界に示そうとした。現在は東京国立近代美術館の工芸館が保管。

1898年にパリ万博の事務館長に任命されるが、国内からの反発もあった。

1900年のパリ万博では、それまでの浮世絵のみならず、仏像、絵巻物、屏風など質の高いものも販売。日本文化や美術の紹介にも努めた。

1902～03年は帰国準備のため売り立てを行った。

1905年に美術館を作るため帰国するも、翌1906年に病没。美術館建設の夢は叶わなかった。

<没後にわかったこと>

・写真ではなく、本物・オリジナルを見せることで、洋画の発展に貢献することとなる。

・しかし、林忠正の遺族は、持っていた200点近いものの価値がわからなかったため、アメリカで売却してしまった。

・ただ、その間10年くらいは日本にあったので、その間に目にする機会を得た人々（白樺派、前田家）もあった。

・林はドガのパステル画を少なくとも15点は所蔵しており（現在メトロポリタン美術館所蔵）、ドガと林の関係もいろいろ興味深い。ドガは日本の浮世絵を交換で手に入れたといわれている。

・カミーユ・ピサロの『森の浴女』や『農家』も林忠正の所蔵だった。『農家』は、その後、松方幸次郎が購入していた。

・パリで親交のあった黒田清輝に西洋画家になることを勧めた一人ともいわれている。

・林忠正の軌跡については、小説家である木々康子が長い間、研究をし、彼女の夫が林忠正の孫であった。林は手紙をきちんと日付入りで保存しており、その手紙は本としてまとめられた。

・新たに他の手紙も出てきたため、木々康子とその娘の高頭麻子（林忠正のひ孫）が本にして出版している。

・日本側が編纂した『Histoire de l'art du Japon(日本美術史)』が、フランス語、英語、ドイツ語に翻訳され、パリ万博が終わる直前に出版された。日本語版は翌年刊行された。林忠正がこれに貢献している。これは、万博のカタログではなく、いわゆる日本

美術史の本。

### 【松方幸次郎】1865～1950年

首相松方正義の三男。実業家で、川崎造船の社長をしていた。第一次世界大戦で莫大な収益を上げた。

美術に対する造詣は深いというわけではなかったが、多くの専門家の意見に耳を傾け、1916年頃から莫大な資産を投じて、コレクションを作り上げ始める。文化国家を創りたい、そのためにも本物を見せるための美術館が日本には必要だと感じていた。

視察旅行で海外に行く度に西洋美術品を買い付け、およそ3000点を集めた。しかし日本に送った物の1350点が散逸。

その他に、アンリ・ヴェヴェールという宝飾デザイナーが集めた膨大な数の浮世絵8000点を買取る。これらは、後に東京国立博物館に寄贈。

1916年にイギリスの画家フランク・ブラングインに会う。彼とは麻布の仙台坂に共楽美術館を作る構想も進め、設計図も完成させる。

1919年頃から、購入した西洋絵画が日本に届き始めるが、関東大震災の影響もあり、1924年に日本政府が、欧米からの美術品も含め輸入品に100%の関税（贅沢税）をかけることにしたため、既に日本に送っていたもの以外は、ロンドン、パリから日本に送らず、そのまま現地で保存することになった。

1927年にメインバンクの十五銀行が破綻し、川崎造船も経営破綻。このため松方の美術品も7回にわたり売立てを行った。

しかし、1939年のロンドンの倉庫の火災で、950点が焼失。フランク・ブラングインの作品も日本に送られる前に焼失してしまう。

その後、パリに残した作品428点は、フランス政府に接収されるが375点が、1951年に寄贈返還される。

松方は1950年に貴重な美術作品を数多く失った状態で、死没してしまう。

#### <旧松方コレクション：総数2800点以上>

・パリから日本に運ばれた1350点が7回にわたり売立てされているが、その中の1200点が散逸。行方を突き止めるのは大変だが、購入&寄贈で少しずつ戻ってきている

・ロンドン倉庫内に保管された950点が火事で消失（その中の3点だけは燃えなかったとされる。どこにあるのかは調査中）

・パリに残したもの：450点～500点（ロダンのものが多い）

➤ 松方の絵を預かった日置釘三郎が戦争中は田舎（アボンダン）の農家に300点ほど疎開させ、守っていた。ただし、戦後、フランス政府に接収されてしまう。（ルノワール、マティス、モネ、マネ、ゴーガン等）

➤ 21点はフランス政府が売りさばってしまう

➤ 日置の生活費と維持費のため、20点を売る

➤ 日本に返還されたものは375点（国立西洋美術館蔵）（吉田首相・シューマン首相兼外相合意）

➤ 但し、フランス政府が返還しなかったものも20点ある。

#### <近年の松方コレクション関係の発見>

・2014年、グルリット（新ナチの画商の子）が持っていたコレクションの中に、松方旧蔵の日置が売った『嵐の海』が含まれていることがわかる。

・2016年、火災焼失した作品リストが発見される（約950点）。これらは川崎造船に保険金が払われているので、評価リストがあるはずということで探していたもの。

・2016年、ルーブル美術館で破損した、『睡蓮 柳の反映』が発見されるも、ボロボロになっていたが、日本に移送され、松方家が国立西洋美術館に寄贈。後に修復される。

・2019年、1920年代にロダン美術館で撮影した松方コレクションの作品のガラス乾板348点が、フランスに保管されていることが分かった。

#### <グルリット事件>

・2012年にグルリットの自宅で、1280点の美術作品が発見され、父の遺産だと主張。

- ・ナチスが美術館を建設しようとしていたため、作品を接収していた。その一部は、彼の父ヒルデブラントが持っていたと思われる。
- ・ベルン美術館に寄贈され、ベルン美術館は略奪品調査を開始。その中にマネの『嵐の海』があり、ベルン美術館の申し出により、国立西洋美術館が購入。
- ・美術館の世界では、ナチスの手を通ったものについては、後で返還訴訟の対象になることがあるので、手を出さないほうが良いと言われている。例えば、SOMPO美術館は、ゴッホの『ひまわり』を、クリスティーズで買ったが、現在係争中。

<まとめ>

近代化を急いでいた日本が気付かなかったものが、“文化の力”。明治期、文化は長い年月をかけて醸成されるものであるという認識が希薄で、すぐに得られる見返りや経済効果を追い求めることを優先させた。このため日本が培って来た江戸時代以前の文化である浮世絵や工芸品が軽視され、大量に海外に流出してしまった。当時は、伝統文化軽視がはびこっており、日本としては西洋に追いつくことしか眼中になかった。“文化の力”を自覚できなかった国とは反対に、文化の力と重要性に気付いていたこの二人の民間人の自主的な貢献は、その後の日本の美術の発展、美術館の発展を促すこととなった。

明治・大正期の日本に欠けていたものを、二人のコレクターが個人で補ったわけである。この二人の素晴らしい活動をよく知ってもらいたいと思っている。

ご参加の皆様からは、たくさんの感動のメッセージをいただきました。

(会員頁のアンケート結果もご覧ください)

アンケート結果を、馬淵先生にご覧いただきましたところ、次のようなお言葉を頂きました。

「当日は皆さま熱心に聴講してくださり、またとても鋭いご質問などが出て、楽しい経験でした。やはり女子教育の最先端を走ってこられた津田塾大学の卒業生の方達は知的関心が並外れているという印象を得ました。今後も国立西洋美術館に関心をもって頂けたら嬉しく存じます。」

幅広いご活躍の馬淵明子先生から温かいメールをいただき、私ども企画部員も嬉しく思っております。

今後も良い企画を同窓生の皆様にご提供できるよう努めてまいります。  
宜しくお願い申し上げます。